



葵御紋大旗2(光西寺蔵、当館寄託 次頁からの資料も同じ)

写真5

新指定文化財「葵御紋大旗」の再考

1、はじめに

今年度、市内光西寺が所蔵する「松井松平家伝来葵紋大旗附大旗地裂 並縫糸 三点」(当館寄託)が川越市指定文化財に指定されました。私は以前、『博物館だより第50号』(2007発行)で本資料の紹介を行いました。その後指定文化財に向け、川越市文化財保護審議会委員で染織専門の水上嘉代子先生等と共に再調査を行い、新たな知見を得ました。この機会にこうした成果を紹介し、改めて本資料の考察を行います。

2、葵御紋大旗の特色

葵御紋大旗は、現在3旒存在します。本資料は、松平周防守家^{すおうのかみ}に伝来した資料で、周防守家の初代康親(1521か~83)が徳川家康(1542~1616)から拝領したと伝わる旗です。便宜上大旗1・2・3とし、染織的な点を中心にそれぞれの特色をまとめてみます。

(大旗1) [写真1]

・法量は破損がひどく広げることが困難なため、不明です。しかし、現在四つ折りの状態となっており、そ

の大きさが大旗2・3とほぼ同じであることから、全体の法量は、大旗2・3と同じと考えられます。つまり、縦約2m57cm×横約2m26cmと推定されます。

・乳は紺麻布で、縦に16個、横に13個の合計29個付いています。

・葵紋は、朱で大きく描かれています。葵紋部分は切り取られ和紙で裏打ちされ、その下にさらに和紙を重ね、それを旗地に縫い付けています。(写真2)また現状で確認できる場所(写真3)は、乳を左にした場合、旗の左下にある葵の葉の茎付近で、形状は大旗2のそれに類似しています。つまり茎付近の旗地の面積は広く、葉脈は太く力強く描かれています。

・旗地は現在白平絹地ですが、葵紋部分の仕様から、江戸時代の後補によるものと考えられ、また葵紋付近に残る旗地裂が、当初の旗地であったと考えられます。この旗地裂を拡大すると、隣り合う経糸2本が一組となって緯糸を織り入れて織られていることが確認できます。(写真4)このような特色のある織物の絹地は、練緯地の「諸羽タイプ」と呼ばれ(注1)、永禄から天正頃とされる「白地州浜形水辺花鳥模様小袖」(東京国立博物館蔵)や、「白地桐矢襖模様胴服」(京都国立博物館蔵)等にも「諸羽タイプ」が用いられています。こうしたことから当初の旗地は、「諸羽タイプ」といわれる練緯地であったといえます。また、現在退色が進んでいますが光沢があり、記録類(注2)から当初は白色であったと考えられます。

(大旗2) [写真5]

・法量は、縦約2m57cm×横約2m26cmです。

・乳は紺麻地で、縦に16個、横に13個の合計29個付いています。

・葵紋は朱で大きく描かれ、直径は約2m9cmとなっています。旗地の基盤刺しを縫う白絹糸が朱色に染まった箇所があるため、葵紋は旗が仕立てられた後に描かれています。朱は薄く黄色味かかった色となっています。形状は茎付近の面積は広く、葉脈は太く力強く、葉先は窪んで描かれています。乳を左にした場合、旗左下に描かれた葵の葉の茎付近や葉脈の形状が、大旗1のそれと類似しています。(写真6)

・旗地は白平絹地で、織幅38～41cmの絹地を縦方向に6枚縫い合わせ、縫い合わせのところは二度縫いとなっています。また強度を高めるため、縦約14cm×横約13cmの基盤刺しが全面に施される等、丁寧に仕立てられています。

(大旗3) [写真7]

・法量は、縦約2m57cm×横約2m26cmです。

・乳は紺麻地で、縦に16個、横に13個の合計29個付いています。

・葵紋は、朱で大きく描かれ、直径は約2m9cmとなっ

ています。旗2同様に、葵紋は旗が仕立てられた後に描かれています。形状は葉脈が大変細く、この旗だけ旗上にある葵の葉の茎が右に曲がって描かれています。

・旗地は白平絹地で、大旗2と同様な仕立てとなっています。また、補修による縫い直しの針穴の後もなく、作製当初の状態と考えられます。

大旗2・3の法量や乳、葵紋の直径等は、「松平家譜」(文書番号32)等に記された内容とほぼ一致します。そして「御拝領御旗其外調帳」(宝暦14年 [1764]、文書番号567、写真8)によると、「(前略)一御拝領葵御紋附大御旗 四本 内三本影ヶ(後略)」とあり、宝暦14年には葵御紋大旗は四旒存在し、その内の三旒は影、つまり写しであったと記されています。ここから宝暦14年段階で既に、大旗の写しは3旒あったことがわかります。大旗2・3はこの3旒の中の2旒とされ、残りの写し1旒は、現在失われてしまったと考えられます。

(包紙) [写真9]

今回の再調査を通して、松井松平家文書(光西寺蔵、当館寄託)の中に「ねり御旗地切レ」(文書番号374)という資料の存在が確認されました。本資料の表書には、「ねり御旗地切レ 古キ御旗地切レ」とあり、「ねり」とは練緯地のことを指しています。(注3)包紙の中には、退色が進んだ練緯地の裂(切レ)、白平絹地の裂(切レ)、白絹糸の3種類が収められています。練緯地の裂を拡大してみると、大旗1の練緯地の裂(切レ)と同様な特徴が確認されました。(写真10)つまりこの練緯地の裂は、「諸羽タイプ」と呼ばれる練緯地で、大旗1の当初の旗地と同じものとわかりました。白平絹地裂は、大旗1の現在の旗地と同じものであることが確認されました。これは、大旗1を江戸時代に補修した際、葵紋部分のみを切り取りそれを生かし、旗地だけを新調して旗を仕立て直し、当初の旗地裂と新調した旗地裂、及び縫い糸を記録用に保存したのものと考えられます。ただ包紙には年代が記されていないため、補修の年代等を比定することはできません。

以上の結果をまとめると、次のようになります。

大旗1は天正期頃のもので、当初の旗(いわゆる原本)とされます。但し現在は、葵紋部分のみが当初の状態を留めていると考えられます。また葵紋部分を裏打ちしてまで保存したり、当初の旗地裂を江戸時代の補修の際に残すという方法から、大旗1が松平周防家にとって非常に大切なものであったことがわかります。大旗2・3は、江戸時代に作製された大旗1の写しといえます。大旗2と3では葵紋の図様が異なり、どちらが図様の様式化が進んだものかの判断は難しいところです。ただ大旗2の葵紋は、今回の再調査によって大旗1のそれと大変類似していることが確認され、古様を示す葵紋で

あることがわかりました。そのため大旗2は、天正期頃の大旗1を忠実に模写して作製された写し、特に江戸時代でも比較的早い時期に作製されたものと考えられます。このため大旗2と3では、大旗2の方が古いと考えられます。大旗3は大旗2よりも後で、宝暦14年までに作製されたとされる写しということになります。

3、葵御紋大旗の由緒

葵御紋大旗は、「松平家譜」等によると、周防守家の初代康親が駿河国三枚橋城主（現静岡県沼津市）であった天正10年（1582）の秋頃、徳川家康から拝領した旗と記されています。また「御家譜附録二」（文書番号77、写真11）の「葵御紋御旗之事并古キ書付之事」には、大旗の形状や由緒の他にそれに関わる書付が記されています。その書付には、周防守家の六代康豊（1682～1735）が享保13年（1728）、八代将軍徳川吉宗の日光社参に供奉した際、葵紋大旗を持参したこと。これが契機で吉宗の上覧となったが、原本は国元の浜田（現島根県浜田市）にあったため、写しが上覧されることとなった。（注4）吉宗の上覧にあたって大旗の由緒を確認したところ、家譜に記された由緒を裏付ける書付等は不明であること。等が記されています。「御家譜附録二」がいつ頃成立したかは不明ですが、江戸時代後期頃から既に、大旗の由緒を確認することができなくなっていることがわかります。この史料を始め多くの編纂史料には、大旗の由緒は「松平家譜」と同内容の記事が記されています。現在のところ、大旗の由緒に関する記事は編纂史料のみで、原史料では確認できません。そのため「松平家譜」等に記された由緒は、何を典拠に記されたのかは不明です。

ただ「松平家譜」に記された天正10年秋前後の時代背景を考えてみますと、康親は同年3月以後に、駿河国東部（現静岡県沼津市付近）の三枚橋城主、つまり徳川領国の東境にある城主となりました。この地は3月まで武田氏の領地でしたが、武田氏の滅亡後、徳川氏の領地になったところでした。徳川氏にとって新しい領地で、北条氏と隣接する重要な地でした。また同年6月の本能寺の変で織田信長が横死したことにより国内が再び乱れはじめ、徳川氏と北条氏によるこの地をめぐる争いは激しさを増してきた状況でした。康親はこのような状況下で、三枚橋城主となり北条氏との度重なる戦で手柄を立てました。政情が不安定で徳川領国の東境目となる三枚橋城主に康親が命じられたことは、家康がいかに康親を信頼していたかが窺われます。家康が康親に、北条氏との戦の功績によって葵紋の大旗を下賜したことは、改めて両者の主従関係を確認・強化し、また、北条氏にこの地は徳川領国であることを認識させる意味合いが含まれていたのではないかと考えられます。こうした当時の情勢を考慮すると、「松

平家譜」に記された大旗の由緒は正しい可能性が高いと考えられます。だからこそ大旗が周防守家にとって大変重要な家宝として、今日まで大切に伝えられてきたのではないのでしょうか。

4、まとめ

今回の再調査によって、大旗に関して重要なことが改めて確認できました。以下に要点をまとめます。

大旗1は天正期頃の旗で、これが「松平家譜」等に記された当初の旗であり、康親が家康から拝領した葵御紋大旗に該当する。但し現在は、葵紋部分のみが当初の姿を残し、旗地部分は江戸時代の後補とされる。大旗2・3は、江戸時代に作製された大旗1の写し。大旗2は大旗1を忠実に模写し、江戸時代の早い時期に作製されたと考えられる。大旗3は2よりも後で、宝暦14年頃までに作製されたとされる。大旗1の現状やその写しが存在することからみて、この旗が周防守家にとって、非常に重要な家宝として認識されている。

大旗の由緒、つまり天正10年の秋頃、康親が家康から拝領したことを裏付ける書付等は存在しない。しかし、その時期頃の大旗が現存すること。家康と康親の関係。また当時の情勢等から総合的に判断すると、「松平家譜」等に記された大旗の由緒は、正しい可能性が高いと考えられる。

葵御紋大旗（3旒）及び包紙（中の旗裂類）は、染織的にみても歴史的にみても、他に類例を見ない大名家資料として大変価値の高い資料といえます。これらの資料が川越市指定文化財に指定されたことは、川越市にとって大変意義あることと思います。また今年、家康没後400年（数え歳）という節目の年にあたります。この年に家康ゆかりの資料が川越市指定文化財になったことは、川越と家康との深いつながりを物語っているともしえましょう。

今後、本資料を展示する機会を設ける予定でいます。

（学芸担当 井口信久）

【付記】

今回の再考にあたり、資料所蔵者である光西寺住職近藤哲氏他、以下の方々から多大なご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

佐藤啓子、水上嘉代子（川越市文化財保護審議会委員）、西岡文夫（甲冑師）、西岡千鶴（組紐師）、藤本正行（歴史研究家）

※順不同、敬称略

【注】

1 「辻が花の誕生」とばと「染織技法」をめぐる文化資源学 小山弓弦 著 東京大学出版会 2012

2 「松平家譜」、「御拝領御旗其外調帳」等（松井松平家文書）

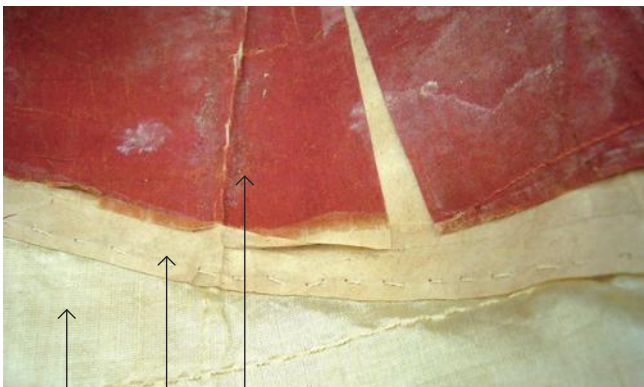
3 「貞丈雑記」卷之三「小袖類の部」東洋文庫

4 「御拝領御旗影」（文書番号568、元文3年〔1738〕8月）からも確認される。

松平周防守家に伝来した古文書類は、松井松平家文書と名付けられています。



写真1 葵御紋大旗1



新調した旗地 和紙

写真2 大旗1の葵紋を裏打ちした様子

裏打ちされた葵紋



写真3 大旗1を広げた様子

当初の旗地裂



写真6 大旗1と大旗2の葵紋が一致する場所

大旗2の葵紋が大旗1のそれと類似していることが確認できた場所



写真7 葵御紋大旗3

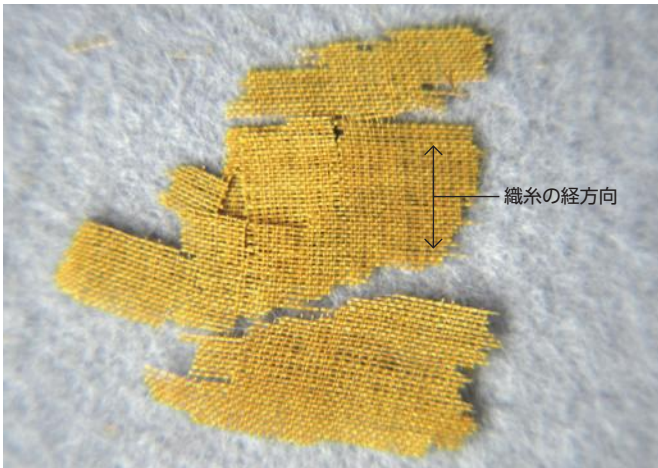


写真4 大旗1の葵紋付近の旗地裂を拡大した様子

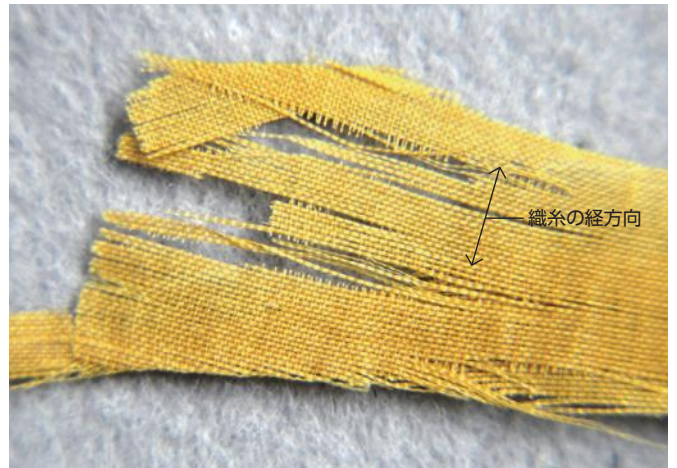


写真10 包紙の中の練緯地の旗地裂を拡大した様子



写真9 包紙



写真8 御拝領御旗其外調帳

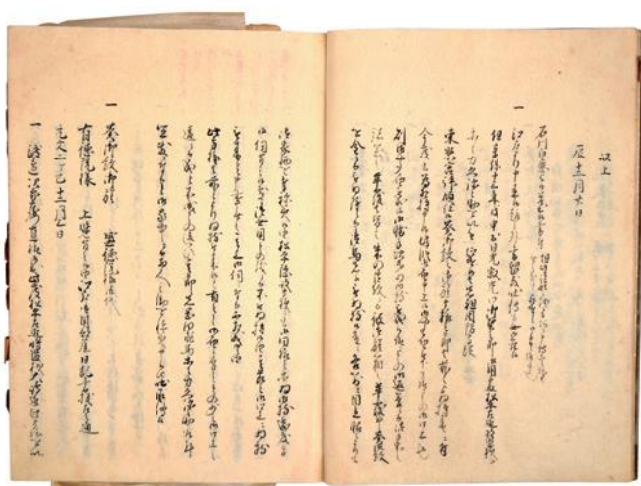
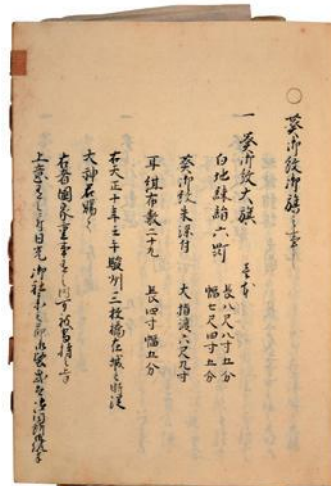


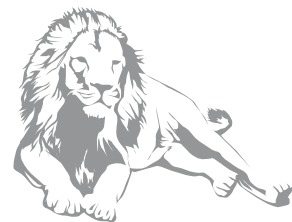
写真11 御家譜附録二





川越動物園を追って

～資料「郷土研究」より～



博物館所蔵の資料の中に「郷土研究」という冊子があります。これは、昭和7年に川越第一尋常小学校(現在の川越小学校)で教職に就かれていた先生方が、郷土教育の資料として編纂したものです。その中身は、戦前の教育であるので「郷土の研究(修身部)」「郷土の言葉(国語部)」「郷土の歴史」「郷土の地理」「郷土の理科」の5部構成となっています。さて、その中の理科の部に面白い項目があったので、説明を加えながら紹介したいと思います。

川越に動物園があった!?

理科の部に「川越動物園」という項目がありました。現在の川越には動物園はありませんが、今から80年ほど前には動物園があったというのです。どの程度のものがいつ、どこにあったのでしょうか。

本書では、簡潔に飼育動物の名称と産地・食料・その他(として性質等)の表と国内の動物園の所在市、動物の輸入港、「さる」の紹介のみがされています。その中から飼育動物の種類を見てみると、

ライオン・豹・熊(金毛熊)・月の輪熊・火喰鳥・ペリカン・ 獺・大トカゲ・錦大蛇・大蛇・コプラ・眞孔雀・ 鳳凰孔雀・ガン・大フクロウ・朝鮮馬・ロバ・金鶏鳥・ 銀鶏鳥・ハツカン・七面鳥・山嵐・山猫・チベット・ キツネ・タヌキ・マンブース・緬羊・山羊・黒猿・ 赤毛猿・尾長猿・アンゴラ兎・チンチラ兎・モルモット・ 九官鳥・ハツカ鳥・桃色インコー・尾長鶏・キジ・カモ・ カナリー・セキセイ	(名称は原文ママ)
---	-----------

一見してこの「川越動物園」は、ある程度の規模がある事が分かります。

日本で最初にできた動物園は、明治15年の上野動物園です。本書「郷土研究」の記述によると、上野以降本書編纂までの間に、“日本における市として動物園の存在する所”として「東京市・大阪市・京都市・名古屋市・甲府市・熊本市・神戸市・鹿児島市・豊橋市(以上何れも市立)・別府市・長岡市・高松市・川越市(以上私立)」に動物園があったとされています。また、「尚公園の附属として四、五種の動物を飼育せる所は各所に多し」との記述から、川越の動物園はしっかりとした規模があった事が分かります。当時国内でも珍しい動物園があったなんて、川越の先進性が垣間見えますね。にもかかわらず他の記録として「川越動物園」の記述を見つける事はなかなかできません。蓮馨寺の境内に遊園地や見世物小屋があった事や、新宿町に競馬場があった事などは記述や写真としても残っているのです(1)。民間資本であったからか、あまり重要視はされていなかったのでしょうか。昭和27年に市制30周年の

記念行事として、喜多院に移動動物園がきた事は、写真資料でも見る事ができますので、この「川越動物園」も特設的なものだったのでしょうか。

紀行文に登場する

この川越動物園であろう動物園が、紀行文「武州喜多院」に出てきます(2)。内容を一部抜き出すと「それからバスに乗ろうと思って北院前へ出て見たが、いくら待っても来ないから近い処の動物園へ入る、入場料五銭、相当のものであった」とあります。このことから「川越動物園」は、喜多院のそばにあった事が分かります。これを資料で確かめてみましょう。

川越動物園の場所

先にも述べた通り、記録類にはなかなか出てこないのですが、本書が編纂された昭和7年の「大日本職業別明細図」では、喜多院のそばに「川越動物園」の文字を見つける事ができました(3)。また、昭和5年の「川越市街全図」、大正15年の「大日本職業別明細図」でもその存在が確認できます。しかし、大正11年の「大日本職業別明細図」には載っていません。このことから「川越動物園」は大正11～15年の間に生まれ、常設されていた事も明らかになりました。



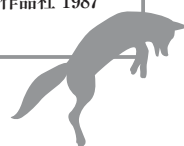
【昭和5年「川越市街全図」より喜多院周辺 川越市立中央図書館蔵】

自分たちの郷土について調べ、子どもたちへの郷土教育に用いた本書「郷土教育」は、世代を超えて尚、私たちに“郷土”を教え続けてくれる貴重な資料となりました。今を生きる私たちも、何か郷土を伝え、残していきたいですね。

(学芸担当 寺内和広)

【註】

- (1) 『川越商工会議所75年誌』(1978)、
『写真アルバム川越市の昭和』(2012)など
- (2) 中里介山「武州喜多院」
『日本随筆紀行第五巻：関東：風吹き騒ぐ平原で』作品社 1987
- (3) 「大日本職業別明細図」3点はすべて個人蔵



川越市蔵造り資料館耐震化事業

博物館では、川越城本丸御殿と川越市蔵造り資料館の2施設の管理運営を行っています。本丸御殿については、平成20年度から平成22年度にかけて保存修理工事を実施しました。竣工直後には東日本大地震があり、川越地方は震度5弱を測りましたが、耐震化工事も施してあったので、少ない被害に留めることができました。一方、蔵造り資料館についても、一部の建物は平成14年度に耐震化工事を施工していたので、事なきを得ましたが、将来的な巨大地震の発生に備えるため、平成26年度から文化庁の補助と指導を受けて、「川越市蔵造り資料館耐震化事業」を始動しました。かねてから各棟で雨漏りや建物の歪み等も指摘されており、併せて修理することも予定しています。

東日本大地震以降、文化庁では伝統的建造物群保存地区の耐震化を推進しており、今回の事業もその一環で、川越市でも木造建造物が多い伝建地区内の防災計画の策定と併せて「時の鐘」とともに耐震化工事を行うものです。

事業初年度である今年は、「耐震化診断・調査」を実施しています。蔵造り資料館の敷地内には図のとおり計7棟の建物がありますが、このうち「便所」を除く6棟とレンガ塀が診断・調査の対象としました。

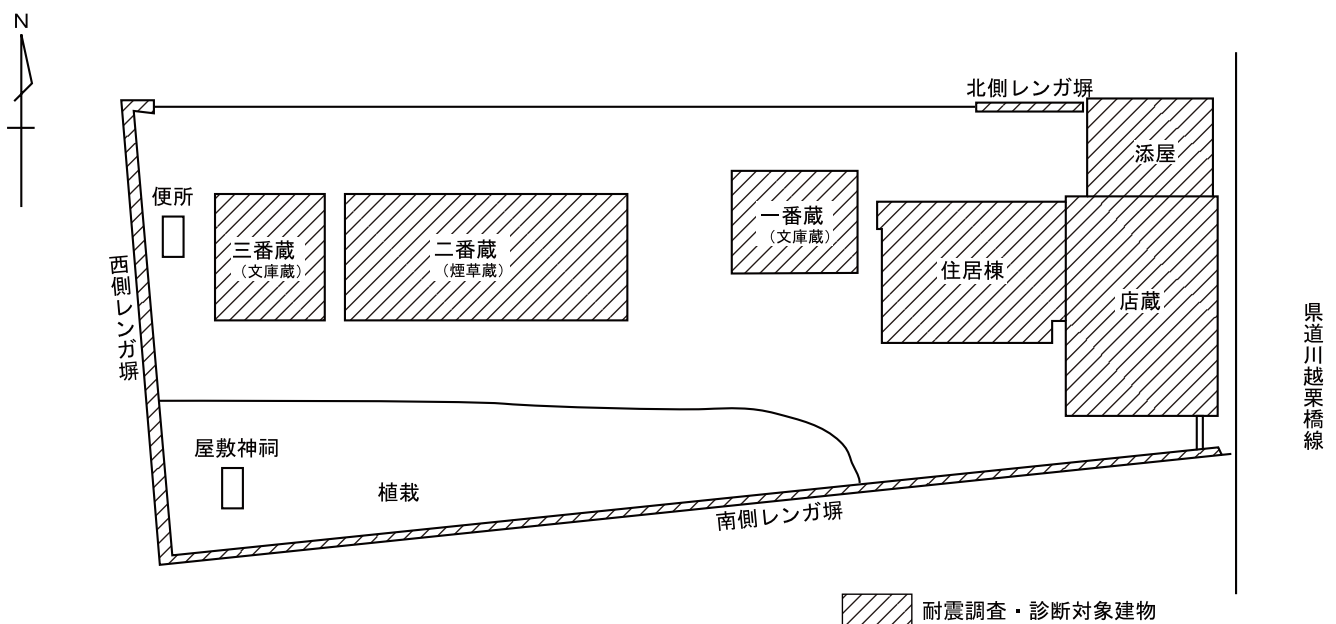
蔵造りの建物は一般に防火建築といわれています

が、耐震性についてはまだ調査・分析があまり行われていないため、全国的なデータが集約されていないのが現状です。

蔵造り資料館は明治26年(1893)に建てられたので、築120年以上になります。分厚い土壁を持つ頑丈な建物とすることもできますが、柱を含めた建物の骨組の部分は木材なので、長い間には少なからず劣化していると考えられます。とくに室内で露出している部分は目視で確認できますが、壁の中に隠れている部分についてはわかりません。今回の調査においては、目視では分からない壁内部の状態についても部分的に解体して状況を確認しています。

耐震調査・診断では、各建物とも少なからず歪み等の不具合があることが分かりました。この成果は、来年度の実施設計に反映させていきますが、耐震性能の向上を重点とし、併せて劣化部分の修理と可能な限りの復元的修理を行うことで、文化財建物としての価値を維持できるよう事業を進めていきたいと考えています。

期間中もどのような工事を行っているかなどの情報を広くみなさんにお伝えできるよう工夫していきたいと考えております。みなさまのご理解とご協力をお願いいたします。



第41回企画展 「古代入間郡の役所と道」

会期：3月28日(土)～5月10日(日)

古代入間郡の「郡家(役所)」があった場所は長く不明とされてきましたが、近年の発掘調査から、川越市霞ヶ関地区にあったことがほぼ確定となってきました。また、幅が12mもある国の官道「東山道武蔵路」がその近くを通り、的場地区には「駅家(使者の休息・馬の乗換え施設)」が置かれていたこともわかってきました。

今回の企画展では、霞ヶ関遺跡や同時代の関連遺跡の出土品等を通して、郡家の姿や機能を復元し、さらに周辺地域との関係に迫ります。また東山道武蔵路のルートと、それと交わる伝路のルートを復元し、現在の「駅伝」の名の由来となった古代の「駅制」「伝制」について考えます。



シンポジウム

「古代入間郡の役所と道」

4月12日(日)

森 公章氏・平川 南氏
木本雅康氏・宮瀧交二氏
申込：当日会場にて直接
会場：やまぶき会館

歴史講座

「古代の入間郡」

4月19日(日)・26日(日)
5月10日(日) 全3回

申込：4月3日(金)より
電話・FAX・電子申請にて

野外博物館教室

「古代武蔵国府と国分寺に行く」

4月18日(土) 定員30名

申込：往復はがきに氏名・住所
電話番号を記入のうえ、4/5(日)迄必着

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	川越市 蔵造り 資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館 ●まつり 会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※()内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)
第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

平成27年 4月							5月							6月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
5	6	7	8	9	10	11	3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13
12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20
19	20	21	22	23	24	25	17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27
26	27	28	29	30			24	25	26	27	28	29	30	28	29	30				
							31													

7月

日	月	火	水	木	金	土
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

●印は、3館休館(博物館、資料館、本丸御殿)
●印は、2館休館(博物館、本丸御殿)
●印は、1館休館(博物館)

◆交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より、
●東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下
車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物
館前バス停下車徒歩0分
●イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・
美術館前バス停下車徒歩0分
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページの
オンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」
の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコード
から登録の手続きができます。随時最新の情報等を配
信します。
※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット
接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担
となります。



発行日 平成27年3月25日 発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 TEL 049-222-5399 FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/